報道用資料

美をめぐる100年のドラマ

フランス絵画の19世紀

2009年6月12日[金]—8月31日[月]

横浜美術館 YOKOHAMA MUSEUM OF ART

〒220−0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい3−4−1

主旨

フランス絵画の19世紀

豊穣な成果をもたらしたフランス19世紀の絵画。この展覧会では新たな視点で、この100年を捉え直してみたいと思います。

これまで19世紀フランス絵画といえば、ダヴィッドによって新古典主義が確立され、ドラクロワを旗手としてロマン主義が台頭し、クールベのレアリスム宣言に続いて、モネやルノワールたちによる印象派が誕生する、というように、革新的な動きの展開として紹介されてきました。しかし、実際はこうした新しい芸術運動の入れ替わりによってのみ進行していったわけではありません。当時画壇で主流を占めていたのは、これら前衛的な画家たちではなく、伝統を遵守するアカデミスムの画家たちだったのです。この展覧会の主眼は、これまで日本で紹介されることの少なかったフランス・アカデミスムの画家たちの魅力を本格的に紹介し、再評価していこうとする点にあります。重厚な歴史画や優美な裸体画は、古典的な絵画遺産が近代においても脈々と生き続けていたことを雄弁に物語っています。しかも、アカデミスムと前衛は、対立しつつも互いに関係を持ち、影響も与えあっており、その豊かで錯綜した全体こそが、新しい時代を切り開く19世紀フランス絵画史そのものだったのです。

まず、ダヴィッド、アングルらによって確立された新古典主義の美学が、いかに継承され、いかなる変容と開花を遂げていったのか、フランス・アカデミスム絵画を総括的に紹介していきます。さらに、ロマン主義、レアリスム、印象主義などの革新的な動向と密接に連動し、かつ対立を繰り返しながら、変貌していくその過程をたどっていきます。二つの流れが、互いに浸透しあい、反発しあいながら、19世紀フランス絵画という芳醇な世界を織り上げているのです。このようなこれまでにない新鮮な展望を日本の皆様にお見せできることは、真に私たち主催者の喜びとするところです。

フランスを中心とするアメリカ、スペイン、日本の約40の美術館から珠玉のコレクション約80点を集めて構成する本展は、フランス・アカデミスムに真正面から取り組み、19世紀のフランス絵画の流れを捉え直した展覧会として、意義ある試みといえるのではないでしょうか。

2009年は、フランス近代絵画を紹介する大規模な展覧会を開催してきた横浜美術館の開館20周年、横浜開港150年にあたります。開館記念展としての充実した内容を期しています。

主催者

◎表紙作品キャプション（すべて部分使用）※最上段左から
・ミシェル＝マルタン・ドロリング《アキレウスの怒り》1810年　パリ、国立美術学校　école nationale supérieure des beaux-arts, Paris
・ジャック＝ルイ・ダヴィッド《男性裸体習作》、または《パトロクロス》1779年頃　シェルブール＝オクトヴィル、トマ＝アンリ美術館　Cherbourg-Octeville, Musée d'art Thomas-Henry
・アンヌ＝ルイ・ジロデ＝トリオゾン《エンデュミオンの眠り》ルーヴル美術館所蔵の1791年に制作された作品のレプリカ　モンタルジ、ジロデ美術館　Cliché Jacques Faujour-musée Girodet
・アントワーヌ＝ジャン・グロ《レフカス島のサッフォー》1801年　バイユー、ジェラール男爵美術館　©Bayeux-Musée Baron-Gérard
・ジャン＝オーギュスト＝ドミニック・アングル＆アレクサンドル・デゴッフ《パフォスのヴィーナス》1852年頃　オルセー美術館　©Photo RMN/H.Lewandowski/digital file by DNPartcom
・ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー《少年と山羊》1847年　村内美術館
・ウジェーヌ・ドラクロワ《シビュレと黄金の小枝》1838年　ヤマザキマザック株式会社
・アリ・シェフェール《聖アウグスティヌスと聖モニカ》1846年のサロン出品作のレプリカ　ロマン派生活美術館　©Musée de la Vie Romantique / Roger-Viollet
・イポリット・ドラロッシュ、通称ポール・ドラロッシュ《クロムウェルとチャールズ１世》1831年　ニーム美術館　©Pierre SCHWARTZ
・レオン・コニエ《死せる娘を描くティントレット》1843年　ボルドー美術館　©Cliché du M.B.A. De Bordeaux / photographe Lysiane Gauthier
・イポリット・フランドラン《トロイアへ向かうギリシャ軍の動きを見張る、プリアモスの息子ポリテス》1834年　サン＝テティエンヌ近代美術館　Musée d'Art Moderne, Saint-Étienne Métropole, Photo Yves Bresson
・トマ・クチュール《ダモクレス》1866年　カーン美術館　Musée des Beaux-arts de Caen, Martine Seyve photographe
・ジャン＝フランソワ・ミレー《施し》1858-59年　シェルブール＝オクトヴィル、トマ＝アンリ美術館　Cherbourg-Octeville, Musée d'art Thomas-Henry
・ポール・ボードリー《真珠と波》1862年　マドリード、プラド美術館　Photographic Archive. Museo Nacional del Prado, Madrid
・アレクサンドル・カバネル＆アドルフ・ジュルダン《ヴィーナスの誕生》1864年頃　ダヘッシュ美術館　©2009, Dahesh Museum of Art, New York. All Rights Reserved.
・ジャン＝レオン・ジェローム《酔ったバッコスとキューピッド》1850年　ボルドー美術館　©Cliché du M.B.A. De Bordeaux / photographe Lysiane Gauthier
・ウィリアム＝アドルフ・ブグロー《フローラとゼフュロス》1875年　ミュルーズ美術館　Mulhouse, Musée des beaux-arts, ©Christian Kempf
・ジャン＝ルイ＝エルネスト・メソニエ《フルートを吹く男》、または《音楽家》1858年　コンピエーニュ宮国立美術館（ルーヴル美術館寄託）　©RMN / Hervé Lewandowski / distributed by DNPartcom
・フェルナン・コルモン、本名フェルナン＝アンヌ・ピエストル《海を見る少女》1882年　島根県立美術館
・ラファエル・コラン《フロレアル（花月）》1886年　アラス美術館　©musée des beaux-arts d'Arras, photo Claude Thériez
・ポール・ゴーガン《水飼い場》1886年　島根県立美術館
・エドゥアール・マネ《カルメンに扮したエミリー・アンブルの肖像》1880年　フィラデルフィア美術館　Philadelphia Museum of Art: Gift of Edgar Scott, 1964 Photo by: PMA Department Photography
・クロード・モネ《ジヴェルニーの積みわら》1884年　ポーラ美術館
・ギュスターヴ・モロー《岩の上の女神》1890年頃　横浜美術館　坂田武雄氏寄贈
・オディロン・ルドン《眼をとじて》制作年不詳　岐阜県美術館

フランス絵画の19世紀
見どころ

【1】19世紀フランス絵画の全貌を紹介

ダヴィッド、アングルらが確立した新古典主義から、ドラクロワを旗手とするロマン主義、
クールベ、ミレーなどレアリスムの台頭、そしてモネ、ルノワールなど印象派の登場といった革新派の胎動まで
19世紀フランス絵画の全貌を紹介します。

【2】19世紀フランス絵画の主流＝アカデミスム絵画を本格的に紹介

新古典主義の美学が基盤となっていたアカデミスム絵画の特徴
①神話に題材を採っている、②圧倒的な画面の大きさ、③歴史に着想を得ている、④細密な描写を支える画力、
⑤モチーフは「生」と「死」、を理解するにふさわしい名品が集結しています。

【3】アカデミスムと革新派を比較

肖像画、裸婦、風景画など同じ主題を、アカデミスムと革新派の画家たちがどう描いていたか、対比して見ることで
表現方法の違い、異なる流派が織り成す19世紀フランス美術界のダイナミックな展開を浮き彫りにします。

【4】欧米日約40館からの名品が集結

ルーヴル美術館、オルセー美術館、ボルドー美術館、リヨン美術館などフランス各地の22の美術館に、
フィラデルフィア美術館、プラド美術館や日本国内の所蔵家などを加え約40の美術館から
珠玉のコレクション約80点が集結します。

[フランス国内からの出品]

◎本展の構成

ジャン＝オーギュスト＝ドミニック・アングル＆アレクサンドル・デゴッフ
《パフォスのヴィーナス》1852年頃　オルセー美術館
©Photo RMN/H.Lewandowski/digital file by DNPartcom

【第１章】アカデミスムの基盤〜新古典主義の確立

ヘルクラネウム（1738）やポンペイ（1748）の古代遺跡発掘など古代への情熱が高まるなか、18世紀後半ギリシャ・ローマの「理想美」を目指す新古典主義が確立された。ギリシャ神話・聖書・古代史などを扱う「歴史画」を第一義とし、前時代のロココ趣味を払拭した簡素で厳格な画面構成と古代彫刻のような力強く緻密なデッサン、筆跡を残さない滑らかな仕上げを特徴とする様式を打ち立てたのである。ダヴィッドを総帥とするこの新古典主義は、彼の高弟、グロ、ジロデ、ジェラールらに受け継がれ、やがて次代を代表するアングルによって、創造的に継承されていく。古代ギリシャに普遍的な美の規範を置く新古典主義が、19世紀フランス・アカデミスムの基盤を形成していった。

ウジェーヌ・ドラクロワ　《シビュレと黄金の小枝》
1838年　ヤマザキマザック株式会社

【第２章】ロマン主義の台頭とアカデミスム第一世代

普遍的な理想美を追求する新古典主義に対して、何よりも個人の感性を重視したロマン主義が1820-1830年代に台頭してくる。その代表がドラクロワである。色彩を重んじ、筆触の効果を生かした力動感溢れる表現で、文学・東方世界・同時代の事件など、主題の幅も大きく広げ、美の多様性を追求していった。このロマン主義を適度に咀嚼しながら、新古典主義の様式と折衷していった中庸派（ジュスト・ミリュー）と呼ばれる画家たちが、アカデミスム第一世代を形成していく。彼らは、歴史画を親しみやすく、また現実感覚に富んだ手法で描き、歴史的風俗画ともいうべき特有の絵画様式を生み出していった。

ジャン＝フランソワ・ミレー　《施し》
1858-59年　シェルブール＝オクトヴィル、トマ＝アンリ美術館　Cherbourg-Octeville, Musée d'art Thomas-Henry

【第３章】アカデミスム第二世代とレアリスムの広がり

19世紀半ば、現実を生きる民衆の姿をありのままに描き出そうとするレアリスムが勃興した。クールベは、王侯のみが描かれることを許されていた歴史画の大画面に民衆を登場させ、ミレーは額に汗して働く農民の英雄的な姿を描き出し、伝統的な主題に挑んだ。

新たな美術享受層を形成する市民社会が成熟していく中で、旧来の古典主義に固執する美術アカデミーの特権的な支配は揺らぎ、絶対的な権威を失っていく。その重要な転換点にあたる1863年、サロン審査への異議申し立てに、皇帝ナポレオン３世は「落選展」を開催し、同年、美術教育制度も改編していった。民衆のための美術という側面がさらに強まるなか、第二帝政期のサロン絵画は、歴史画と風俗画（日常を描く絵画）の境界が一層あいまいになっていった。

（上）ジュール・バスティアン＝ルパージュ
《干し草》1877年　オルセー美術館
©Photo RMN/H.Lewandowski/digital file by DNPartcom
（下）カミーユ・ピサロ《エヌリー街道の眺め》
1879年　ポーラ美術館

【第４章】アカデミスム第三世代と印象派以後の展開

光降り注ぐ都市とその周辺を、印象派の画家たちは色鮮やかにカンヴァスに映しとめた。この虹色のパレットは、バスティアン＝ルパージュやコランらアカデミスムの画家たちにも浸透していった。印象派は、戸外制作や筆触分割といった、手法・表現上の革命をもたらすと同時に、1874年以後自らグループ展を開催することによって、公に作品を問うことのできる唯一の展覧会であったサロン以外に、作品発表の方途を開き、画商・批評家の支援を得て社会的な承認を求めていった点でも、伝説的な個展を開催したクールベやマネに継ぐ変革者といえる。

この時期サロンも改組され、1881年には国家主催から民営の「フランス芸術家協会」によるサロンとなり、さらに分裂して1890年には「国民美術協会」が創立され、翌年よりそのサロンも開催された。1884年には「独立美術家協会」も創設され、無審査のアンデパンダン展が始まる。1880年代以降、新印象主義、象徴主義など様々な革新的動きが生み出されていった。